

March 2024

京都大学総合博物館 ニュースレター



2023 年度企画展「文化財発掘 X 比叡山麓の縄文世界」(2-3 頁に関連記事)

2023 年度企画展「文化財発掘 X 比叡山麓の縄文世界」.....	2
考古学常設展青銅器展示の更新	4
子ども博物館だより 〈4〉	5
総合博物館コレクション研究 〈20〉	6
北館 2 階展示ケースの LED 化	8
外部評価委員会の開催	8
研究資源アーカイブ通信 〈29〉	9
総合博物館日誌 (2023 年 11 月～2024 年 2 月)	10

2023 年度企画展

文化財発掘X 比叡山麓の縄文世界

開催期間：2024年3月6日(水)～6月9日(日)

京都大学構内にある遺跡の埋蔵文化財調査や研究成果を紹介するシリーズ「文化財発掘」展も今年度で10回目を迎えることができました。今回の展示では、比叡山の山麓に形成された扇状地で生活を営んだ縄文人の暮らしに光をあてて展示を構成しました。

比叡山山麓に広がった扇状地は、戦後の都市化によって、往事の面影を見ることは困難ですが、縄文時代には照葉樹に落葉樹が混じり込む豊かな森を形成していました。この森の恵みを享受しつつ、長期にわたって縄文人がこの地に暮らした様子が明らかになっています。比叡山の西麓では、1923年、本学文学部考古学教室の初代教授となった濱田耕作が農学部敷地（現・北部構内）で北白川追分町遺跡を発見し、1934年には北白川小倉町遺跡の発掘調査がおこなわれています。比叡山の東麓では、1948年、本学考古学教室によって大津市滋賀里遺跡の発掘調査が実施されています。これらはいずれも近畿地方を代表する縄文時代の遺跡となって、当地方の縄文文化の解明に重要な役割を果たしてきました。

1948年に調査され、近畿地方の晩期土器編年の骨格となった滋賀里遺跡資料（文学研究科考古学研究室蔵）については、その一部が本館常設展示室の一角に展示されてきましたが、多くの資料は未公開のままでした。調査を担当した故坪井清足氏が生前、調査報告書の刊行のために準備されていた、出土資料のコロタイプ写真図版に解説文を付した『滋賀里遺跡資料図譜』（滋賀里資料研究会編）を刊行したのは昨年のことでした。近畿地方の縄文土器研究史上、重要な位置を占める滋賀里遺跡1948年出土資料の全容が明らかになったのです。



滋賀里資料研究会編『滋賀里遺跡資料図譜』2023年



滋賀里遺跡出土土器 深鉢



滋賀里遺跡出土土器 鉢

今回の展示では、滋賀里遺跡資料の全容公開を受けて、大きく2つの柱で展示を構成いたしました。最初の柱が比叡山の東側の縄文遺跡の紹介で、滋賀里遺跡を中心に、真野遺跡・雄琴段々遺跡（ともに早期）、下仰木天神山遺跡・穴太遺跡（ともに後期）の資料を展示しました。滋賀里遺跡は1948年の調査以降、湖西線の建設に伴って1971～72年に大規模な調査がおこなわれ、大量の縄文時代資料が発見されています。またその後も、継続的に発掘調査がなされています。1948年出土資料を中心に、湖西線建設に伴って出土した土器や石器、骨角製品、木製品などを展示しました。展観に供した多くの土器は「滋賀里式」と呼ばれる晩期の土器で、縄文の施文されない簡素な土器です。見栄えのする縄文土器ではあ



滋賀里遺跡出土の骨角製装身具(左)と石製装身具(右)

りませんが、列島の東西で二大文化圏が成立する縄文時代晩期の西を代表する土器として、こんな縄文土器もあるのか、と感じ取っていただければと考えました。骨角製の装身具や木製の斧の柄、弓は通常の遺跡では腐朽してしまい、残ることが稀な資料です。これらをじっくり展観いただければ、この地の縄文人の技が決して劣ってはいなかったことを理解していただけたと思います。

二つ目の柱は比叡山の西麓で営まれた遺跡の紹介です。こちら側の遺跡に関しては、本館がまだ文学部博物館であった1991年に「先史時代の北白川」という企画展で紹介しています。また、2017年に開催された特別展「火焰型土器と西の縄文」でも一部資料が展示されておりますので、できるだけ出展資料が重複しないように展示を構成いたしました。

吉田本町遺跡の草創期の有茎尖頭器、北白川上終町遺跡や吉田二本松町遺跡出土の早期の押型文土器、北白川別当町遺跡の前期土器、北白川追分町遺跡の中期・後期土器、吉田本町遺跡の晩期土器、北白川追分町遺跡から出土した中期と晩期の石棒、後期の土製耳飾りなどの展示を通じて、縄文人の活動が長期にわたっていたことを観覧できるようにしました。



一乗寺向畑町遺跡出土土器 注口土器

以上の大きな柱とは別にトピック的な展示を4つ準備いたしました。注口土器と呼ばれる注ぎ口がついた土器が後期以降、この地域でも出現するようになります。本館が所蔵しています東日本の注口土器とともに展示することで、その様相を理解できるコーナーを作りました。二つ目は、縄文(縄目文様)に関するコーナーです。西日本では縄文時代後期後葉に、土器に縄文を施文することをやめてしまいます。その直前、多彩な縄文が流行しますが、一乗寺向畑町遺跡はその代表的な遺跡です。今回、一乗寺向畑町遺跡から出土した縄文土器と「縄文学の父」とも呼ばれる山内清男のコレクションとともに展観に供しました。縄目文様の奥深さを実感いただけると考えております。この2つのコーナーは、二人の若手研究者の協力を得て実現しました。三つ目は、大型植物遺体を展示するコーナーです。1970年代から組織的継続的に実施されている北白川追分町遺跡の調査は、自然科学分野との共同研究が一つの特色でもありました。1970年代、当時、大阪市立大学院生であった故南木睦彦氏(流通科学大学名誉教授)が担当した大型植物遺体は流通科学大学で長らく保管されてきましたが、このたび40年以上を経て京都大学へ戻ってきました。この資料の一部と南木氏の調査記録類を展示しました。考古学と自然科学の文理融合の草分け的な仕事として見ていただければと思います。

最後の四つ目がデジタル技術を応用した展示です。奈良文化財研究所の金田明大氏・山口欧志氏の協力を得て、滋賀里遺跡から出土した東日本に系譜をもつ土器について、SfM-MVSを用いた3Dモデルを作成し、デジタルサイネージで再現いたしました。また、縄目文様については、近年開発された〈ひかり拓本〉による画像を展観に供しました。展示しました実物資料と比較観察しつつ展観していただくことを企画しました。

新しい技術の考古学への応用も含めて、比叡山山麓で展開した縄文遺跡の資料をじっくり観覧いただき、縄文の世界に思いを馳せる機会となることを願っています。

今回の展示にあたっては、文学研究科考古学研究室をはじめ、京都市考古資料館、滋賀県立安土城考古博物館、滋賀県埋蔵文化財センター、大津市埋蔵文化財調査センター、国立文化財機構奈良文化財研究所、辻誠一郎氏ほか多くの皆様に大変お世話になりました。末尾ながら記してお礼申し上げます。

(文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター
准教授 千葉豊)

考古学常設展青銅器展示の更新

2023年12月6日、考古学の常設展示を一部更新した。今まで陳列されていた綏遠青銅器（オールドス青銅器）を入れ替え、これら小型青銅器の研究方法について理解の促進を図る。

今回新たに出陳したのは、当館所蔵の小型帯金具（蝶形牌飾）である。衣服の上から腰に巻く帯の装飾として、基本的に複数で1セットで取り付けられる。この蝶形牌飾は紀元前1千年紀中ごろ以降アルタイ山脈以東の広い範囲の遊牧民集団の間で伝播した均質な青銅器の一例と従来は考えられてきており、主に表面の紋様に着目した分類や型式学的研究がおこなわれてきた。しかし詳細に観察すると、よく似た紋様の蝶形牌飾にも、裏側に残る鑄造痕跡には複数のパターンがあり、その違いに対応して紋様も微妙に異なることを見出せる。この紋様と鑄造技法に着目しつつ近年増加した発掘事例をみると、異なる系統の蝶形牌飾が分布を違えながらも同時に存在しており、またその上で異なる系統の事例が同一の腰帯に取り付けられることもあったことがわかる。当該期には活動範囲を異にする複数系統の帯飾製作者が存在し、使用者はそれら製作者から必要に応じて個別に帯金具を入手していた。よく似た製品が広域に拡散する場合、その拡散元となった集団の強大さがまずは要因として思い起こされるが、蝶形牌飾の場合はむしろ、当時の遊牧民諸集団や個人の人々の活動の広範さと散発性こそが、帯金具の見かけ上の均質性をもたらした可能性が高い。この可能性を提示または検証するためには蝶形牌飾の裏面の情報が重要になるが、本展示では鏡台を使用して裏面を観察できるようにしている。

上記のような研究は、広い範囲で出土する遺物を同一の水準で観察し記録することにより初めて可能になる。

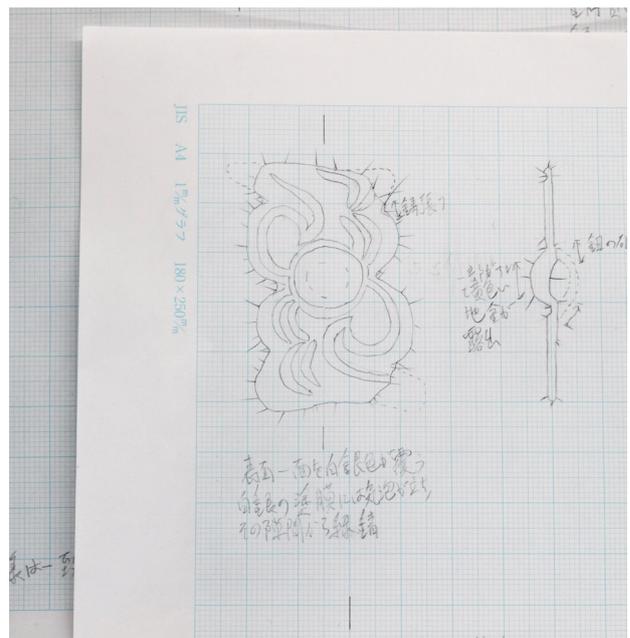


新たに出陳した蝶形牌飾 A 類



新たに出陳した蝶形牌飾 C 類

その方法の一つが、日本考古学がこれまで重視してきた実物資料の観察と実測である。考古学常設展ではすでに土器の実測方法について展示しているが、今回は小型青銅器の実測図を新たに展示し、それがもたらす情報を成果と関連付けながら示す。



蝶形牌飾 C 類の実測図

また実測図などの考古遺物の記録方法は、研究の進展に応じて時に変化が求められる。本展示にて出陳した資料は、報告当初は裏面の鑄造痕跡の重要性は認識されておらず、表の美術意匠の写真のみが報告書に掲載されていた。資料の増加と研究の進展により、鑄造技法やその痕跡の重要性が指摘されたのは近年のことである。最新の研究の要請に応じるため、各博物館は貴重な資料を大切に保管し、次代に託してゆく必要性も、本展示を通じ感じ取っていただきたい。

(総合博物館 研究員 坂川幸祐)

子ども博物館だより 〈4〉

大学院生がアウトリーチ活動を学ぶ場所

筆者は最初に文学研究科の大学院生として、後には総合博物館の教員として、2009年度～2016年度までの7年間にわたり子ども博物館の運営に関わった。その経験は、アウトリーチ活動の重要性を強く意識するきっかけを筆者に与えてくれた重要なものであり、その機会を与えてくれた総合博物館には今でも深く感謝している。

筆者は人文地理学を専攻しているため、子ども博物館スタッフとしては、その知識を活かして、御土居をはじめとする京都の簡易なジオラマ作りから取り組むことになった。これは当時の展示と連動した企画内で、旧版地形図の内容をベースに、厚紙、紙粘土などを用いた作業をしてもらいつつ、明治20年代の京都の歴史的景観やその背景知識について学んでもらおうとするものであった。しかし、大人の方には楽しんでいただけたものの、肝心の子どもにはあまりウケが良くなく、子ども博物館のブースなのに子どもが近づいてくれないというジレンマに陥った。そこで、積木を用いたアクティビティや、写真を用いた簡易なレクチャーを組み合わせるなど、いろいろ試行錯誤を行ってみたものの、全体には不完全燃焼に終わった感が否めなかった。顧みてみると、この実践は伝えたい内容を一方的に押し付ける姿勢は変えずに、子どもが好みそうと独りよがり考えた小手先の手法のみで乗り越えようとしていたことに思い至り、反省



することとなった。そこで、子どもが地理学のどんな要素に興味を持つのか改めて来館者の子どもにリサーチを行い、途中で提供するコンテンツの根本的な再検討を行った。その結果、コンテンツの内容を大きく入れ替え、国旗のカードを用いて、世界地誌の内容についての知識を学んでもらう内容ができあがり、満足のいく結果を得ることができた。

この経験を通じて、一方的に知識を押し付けるのではなく、受容者の興味と対話し、その上でさらに学んでもらうためにはどうすべきかを深く考える重要性を学ぶことができた。こうした視点から見た子ども博物館の重要性は、2015年に総合博物館から刊行された『挑戦する大学博物館』に所収された論文でも論理的に整理を試みているのでご一読いただきたい。

(佛教大学 准教授 網島聖)

鉱物の面白さを伝えたその先

私の研究の専門は鉱物学であり、子ども博物館ではたくさんのお子さんの鉱物を用意して、実際に手にとって見比べてみるというワークショップ(WS)を行っている。

「鉱物」とは何かを説明できる方は存外少なく、「きれいな石」くらいの認識であることが多い。このWSではその認識を正し、正確な定義を伝えることで、社会への鉱物学の正しい周知に貢献云々…というようなことは一切考えていない。鉱物を実際に触ってみて、少しでも面白いと思ってもらえれば大成功、といった具合である。そのため、WSの導入には比較的親しみのある誕生石を見てもらっている。ただし、それらは宝石のように加工される前の原石である。宝石が元来どのような姿かたちで産出しているのかを知るだけでも、鉱物への解像度が上がり、興味を持ってもらえる。他にも鉱物と光の相互作用で顕われる特性を見てもらうと、見た目にはわかりやすいため好評である。時には「鉱物標本作り」も行っている。好きな小石の一つを選び、それに「ラベル」をつけ

る簡単な作業だが、博物館的には重要な作業である。石を拾い集めている小学生は結構多く、ぜひラベルをつけて新たな価値を創造して貰えたらと思っている。

そのような感じでWSを通して鉱物に興味を思ってもらえるお子さんはかなり多い印象である。しかし、鉱物というのは学校教育ではあまり扱われず、興味を持ったその後の受け皿がほとんど無いということも強く感じている。そのため、一時的な興味で終わってしまう子がほとんどだと思われる。中には、学校には詳しい人がいないため家で図鑑を読み耽り、何度も私のWSに通ってくれる、というお子さんもいたりするが、もっと学べる場の選択肢を増やしてあげたいと思う日々である。このWSの先にどのような選択肢を示すべきなのかは課題ではあるが、今後も子ども博物館がきっかけを与える場であり、一つの受け皿でも有り続けられるように、できるだけ活動を続けていきたいと思っている。

(総合博物館 助教 竹之内惇志)

総合博物館コレクション研究〈20〉

濟州島のソメイヨシノ

現代の日本の春を代表する桜といえばソメイヨシノであろう。北海道から九州までの広い地域で植栽され、葉を展開する前に花だけが一斉に咲いて見事である。あっという間に散ってしまうため、花の時期が近づくと気象庁の発表する開花予想日を気にする人も多いことだろう。

ところが、ソメイヨシノの起源についてはよくわかっていないのである。その推定された原産地の一つに韓国の濟州島があり、この説に関わる標本が京都大学総合博物館に保存されている。

江戸時代には「吉野桜」と呼ばれ栽培されていたソメイヨシノは、奈良県の吉野桜（ヤマザクラ）とは異なるものであることから、上野公園の桜を調査した東京帝室博物館の藤野寄命（1900）により「染井吉野」と名付けられた。「染井」の名は、この桜が染井村（現在の東京都豊島区駒込）から「吉野桜」として売り出されたとの伝聞によるものである。翌1901年には東京帝国大学教授の松村任三により *Prunus yedoensis* の学名が与えられた。形容語の *yedoensis* は「江戸の」という意味である。このとき松村は、原産地不明で伊豆大島由来と伝える、と書いている。

東京帝国大学で松村の指導を受けバラ科の植物を研究していた小泉源一は、ソメイヨシノの起源地に興味を持ち、1912年開花期を待って原産地と伝えられる伊豆大島を訪れている。しかしソメイヨシノはなく、みつかったのはオオシマザクラばかりであった。そして1913年、日本とその周辺地域からひろく植物標本を集めていたフランス人宣教師 U. Faurie が青森の標本室に所蔵していたサクラ属の全標本を借り出して小泉が検討したところ、「濟州島産の一種のサクラは同島の600 m 突の高地に採りしものにして其性状はよくソメイヨシノザクラに一致す」として、「元来此サクラは日本には最普通に栽培せらるれども未其自生地不明なりしが今回図らずも分明するに至りし」というのである。

一方、ドイツの植物学者 E. Koehne は、その前年1912年に、濟州島で採集された標本に基づき、ソメイヨシノの変種として *Prunus yedoensis* var. *nudiflora* を発表していた。Koehne は松村のソメイヨシノの原発表論文を引用し、原産地が不明なソメイヨシノの変種が濟州島でみつかったことは重要で興味深いことだと述べてい

る。Koehne は濟州島の標高600 m でフランス人宣教師 E. Taquet が1908年に採集した標本 (Taquet 4638) を1点だけ引用しており、小泉が1913年に検討した Faurie のサクラ属標本に含まれていた濟州島の標本とは、おそらくこの標本の重複標本と思われる。Taquet は Faurie と同じく、採集品を世界の主な標本館に送っているが、Koehne のもとに送られた標本の所在は不明である。Koehne の発表した新分類群のタイプの多くはベルリン植物園の標本館に収められていた。1944年の空襲により焼失したおよそ500万点の標本の中に含まれていたのかもしれない。

Faurie が青森の標本室に保管していた標本約6万点は、Faurie の没後、1920年に京都帝国大学理学部に寄贈された。現在は京都大学総合博物館に所蔵されており、*Prunus yedoensis* var. *nudiflora* の重複標本もこの中に見ることができる（写真1）。しかし、この植物は日本国

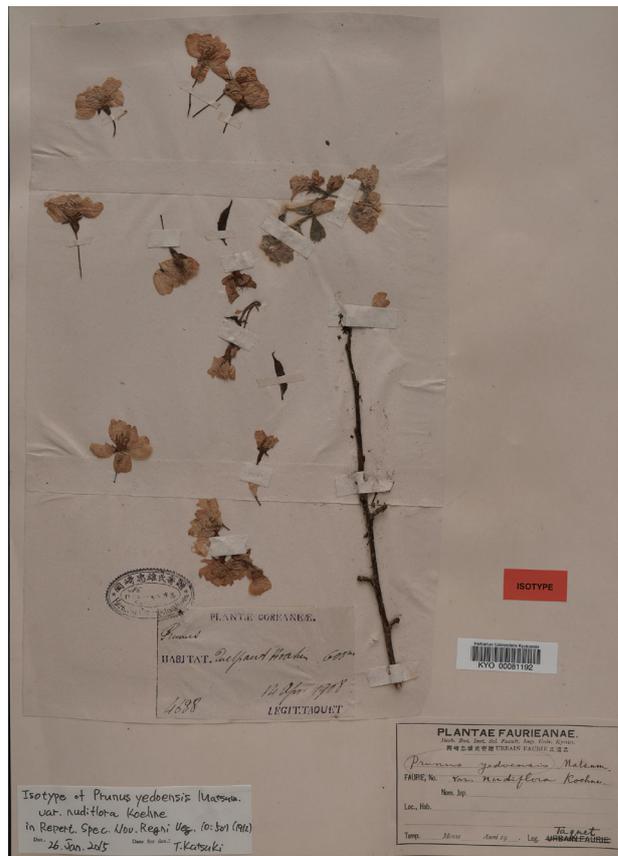


写真1 エイシュウザクラ *Prunus × nudiflora* (= *P. yedoensis* var. *nudiflora*) のシタイプ標本 (E. Taquet 4638, KYO 00081192). ×は雑種であることを示す記号。



写真2 エイシュウザクラ
(小泉源一 s.n., KYO 00106623)



写真3 ソメイヨシノ *P. × yedoensis*
(小泉源一 s.n., KYO 00077866)

内でひろく栽培されているソメイヨシノとは似ているが異なるものである。

1919年、小泉源一は京都帝国大学助教授として着任し、植物分類学を担当することになる。着任してすぐに寄贈された Faurie コレクションで済州島の「ソメイヨシノ (var. *nudiflora*)」を再検した小泉は、真のソメイヨシノが済州島にもあるのか気になったのに違いない。1932年、小泉は済州島に渡り、ついに漢拏山南山腹 600 m の山地でその両方が生育しているのをみつけたのである (写真2, 写真3)。同年、小泉は「染井吉野桜の天生地分明す」と題した報告を発表し、Koehne の *Prunus yedoensis* var. *nudiflora* は独立種 *P. nudiflora* としエイシュウザクラ (瀛洲桜) の名を与えた。瀛洲とは古代中国で仙人が住むとされた東方海中の三神山 (蓬萊, 方丈, 瀛洲) の一つである。

こうしてソメイヨシノ済州島起源説はかなり有力な説とされたが、その一方でイギリス人植物採集家 E.H. Wilson は『The Cherries of Japan』(1916)の中で、ソメイヨシノがエドヒガンとオオシマザクラの雑種である可能性を指摘していた。国立遺伝学研究所の竹中要 (1965)

は交配実験により、エドヒガンとオオシマザクラの雑種にソメイヨシノに似たものが現れることを示した。その後の分子遺伝学的研究の結果から、日本国内にひろく栽培されるソメイヨシノは、エドヒガンを母親としてオオシマザクラとの雑種に由来する遺伝的に同一のクローンであることがわかっている。すなわち選抜され確立した、主として接ぎ木で殖やされる栽培品種ということである。染井村から売り出されたというこの栽培品種がどこで起源したかはわからないが、済州島ということはなさそうに思える。済州島のソメイヨシノは、むしろ日本から持ち込まれたのではないだろうか。一方、エイシュウザクラはエドヒガンとまた別の桜であるオオヤマザクラとの種間雑種で、おそらく済州島起源であるだろう。このややこしいグループに属する桜の学名が、森林総合研究所の勝木俊雄と果樹研究所の池谷裕幸により整理されたのは2016年のことである。

(総合博物館 教授 永益英敏)

北館 2 階展示ケースの LED 化

11月に特別展などの際に使用する行灯ケース4台と覗きケース3台の照明をLED化した。これまで蛍光灯が使用されていたが、安定器の劣化により、いつ切れるかという心配が常にあった。また、紫外線吸収膜が付いているとはいえ、蛍光灯は紫外線を照射してしまうため、蝶標本のように光に弱い資料の展示には適していなかった。その点、LEDは紫外線をほとんど照射しないため、資料に与える影響は比較的小さくなる。さらに、この度の工事により調光機能が追加されたことで、資料の光に対する感受性に応じた光量の調整が可能となった。

早速、特別展「蝶に会える日—村田泰隆コレクション展—Vol.2」で、これらの改善を施したケースを利用した。一部の蝶の翅は裏と表で色彩が大きく異なり、また角度によっても見え方が大きく変わるため、四方向から観察可能な行灯ケースが活躍した。具体的には、行灯ケースに両面ガラスの標本箱を立てて設置し、蝶標本の裏表を観察できるようにした。この展示は好評だった。また、一部の標本を覗きケースで展示することで、昨年度の展示（Vol.1）で寄せられた「標本にもっと近寄って見た



LED化した行灯ケース（手前）と覗きケース（左奥）

い」という要望に応えることができた。とくに、間近で見るトリバネアゲハは迫力があつた。しかし、覗きケースでは光量を下げるとケース内の手前と奥、中央の照度の差が大きくなり、翅の本来の美しさが十分に表現されなかったのは残念であった。今後の展示では、光を均一に拡散させるためにディフューザーを挟むなどの工夫をしたいと考えている。

（総合博物館 助教 伊藤毅）

外部評価委員会の開催

2023年12月8日（金）

総合博物館では、3年ごとに自己点検・評価および外部評価を実施することとし、2020年11月には第1回の外部評価委員会を開催した。それから3年が経過し、12月に第2回目となる外部評価を行うこととなった。今回の評価対象は2019～2021年度の諸活動で、コロナ禍にあつて総合博物館も大きな影響を受けた時期にあたる。外部評価に際しては、大学博物館、国立・公立の博物館、文化庁等の官公庁の職員、博物館の活動に関わる有識者から次の4名の方々に外部評価委員を委嘱した。

清水則雄〔広島大学総合博物館展示情報・研究企画部門長准教授〕、神保宇嗣〔国立科学博物館標本資料センター副コレクションディレクター〕、田良島哲〔東京国立博物館特任研究員（情報課長）〕、高尾戸美〔合同会社マーブルワークショップ代表〕。委員のみなさんには事前に2022年度作成の『自己点検・評価報告書』や総合博物館年報、ニュースレター等を資料として送付し、8つの評価項目や5段階評価の方式などを共有したうえで、外部評価に臨んでいただいた。

当日は館内視察ののち、講演室にて外部評価委員と総合博物館構成員が個々の評価項目について討議を行っ



た。3年間の諸活動を多面的な視点から評価いただき、すべての項目にわたり貴重なご意見をうかがうなかで、館の現状と課題、今後優先的になすべきことが明確になり、それを構成員で共有するまたとない機会となった。後日にお送りいただいた評価シート「評価委員からの評価と提言」も含めて2024年2月に外部評価報告書を取りまとめることができた。

（総合博物館 准教授 村上由美子）

研究資源アーカイブ通信〈29〉活動報告（2023年2月～2024年1月）

2022年度

2月12日：毎日放送「京都知新——宇宙物理学者・柴田一成」に、「宮本正太郎資料：火星スケッチ，1955–1976」画像提供

2月28日：田中淡『中国建築と庭園（田中淡著作集2）』（中央公論美術出版）に、「田中淡建築庭園写真，1967–2003」画像提供

3月23日～5月22日：茨木市立キリシタン遺物史料館第13回企画展「ザビエルのほこ——隠しつづけたキリシタン遺物」に、「京都大学総合博物館蔵キリシタン関係資料，ca. 1920–2004」画像提供

3月29日：研究資源アーカイブ運営委員会（第24回）開催（次年度事業検討，研究資源化プロジェクト1件新規採択，1件継続）

3月30日：『京都大学総合博物館ニュースレター』第57号に、「研究資源アーカイブ通信〈26〉活動報告（2021年10月～2023年2月）」掲載

3月31日：蜷川順子『祈りの形にみる西洋近世 茨木の銅版画シリーズ〈七秘跡と七美德がある主の祈りの七請願〉』（関西大学出版部）に、「京都大学総合博物館蔵キリシタン関係資料，ca. 1920–2004」画像提供

同日：牟田口章人「阿武山古墳採取遺物の分析」（『帝塚山大学考古学研究所研究報告』第25号）に、「京都大学考古学研究室写真：阿武山古墳調査，1934，1987」画像提供

同日：牟田口章人「百濟・日本・唐における衣冠の副葬と施捨」（『日本文化史研究』第54号）に、「京都大学考古学研究室写真：阿武山古墳調査，1934，1987」画像提供

同日：『京都大学総合博物館2022年度特別展「創造と越境の125年」展示記録』に、「『近衛ロンド』録音テープ資料，ca. 1973–1977」画像提供

2023年度

4月1日：中島林彦「nippon 天文遺産 第43回：惑星気象学を開拓した花山天文台での火星スケッチ」（『日経サイエン

ス』第53巻第4号）に、「宮本正太郎資料：火星スケッチ，1955–1976」画像提供

4月19日：「福井謙一研究資料，1936–1988（主年代1940–1982）」公開

4月26日：福井謙一記念研究センターにて「福井謙一研究資料，1936–1988（主年代1940–1982）」記者説明会開催



5月3日：『毎日新聞』（朝刊）に、「ノーベル賞 着想の原点 福井謙一博士のメモ公開 京大 オンラインで1288点」掲載

5月14日：『朝日新聞』（朝刊）に、「福井謙一博士 努力の軌跡 研究メモなどデジタル化」掲載

5月23日：京都市内にて調査

5月26日：『読売新聞』（朝刊）に、「福井博士 研究メモ画像化 京大ネット公開 新聞に化学式 考察の跡」掲載

7月27日：研究資源アーカイブ運営委員会（第25回）開催

8月9日：『京都大学総合博物館ニュースレター』第58号に、「研究資源アーカイブ通信〈27〉アーカイブズと私（5）田中一義先生と西本佳央先生に聞く『福井謙一研究資料，1936–1988（主年代1940–1982）』（聞き手：齋藤歩）」掲載

8月18日：塩瀬隆之・齋藤歩「展示デザインから考えるアーカイブズを残す意味」（『化学』2023年9月号）に、「福井謙一研究資料，1936–1988（主年代1940–1982）」画像提供

8月19日：神庭信幸「キリシタン禁制(3)：美術品と災禍」（『美術の窓』第480号）に、「京都大学総合博物館蔵キリシタン関係資料，ca. 1920–2004」画像提供

8月28日：「佐藤幹夫関係資料：講義ノートおよび講義録音，1984–1986」公開

9月2日，9日，16日：「デジタルアーキビスト資格取得講座」受講（平澤）

9月4日，6日，7日：2024年度実施分「研究資源化プロジェクト」説明相談会（オンライン）開催

10月12日：総合博物館にて調査

10月12日～14日：農学研究所展示「学術探検と遺伝資源——田中正武アーカイブズとNBRP・コムギリソース」に，展示実行委員として協力（齋藤，平澤）

10月19日：総合研究14号館にて調査

11月8日：総合博物館にて調査

11月15日：松尾恒一「長崎のかくれキリシタンのマリア信仰」（永池健二編『女性の力から歴史をみる』）に，「京都大学総合博物館蔵キリシタン関係資料，ca. 1920–2004」画像提供

同日：桑野梓「初期洋風画発見の状況を検証する——茨木のザビエル像・マリア十五玄義図を中心に」（『鹿島美術研究』年報40号別冊）に，「京都大学総合博物館蔵キリシタン関係資料，ca. 1920–2004」画像提供

11月21日，22日：福井謙一記念研究センターにて調査

12月8日：国立文化財機構文化財防災センター研修「一時保管環境の生物被害対策ワークショップ」受講（上羽）

12月16日～2024年1月14日：奈良県立橿原考古学研究所附属博物館特別陳列「鉄道と考古学」に，「京都帝国大学文学部考古学教室ガラス乾板写真：石舞台古墳発掘，1933–1935」画像提供

12月19日：難波毅『トヨタランドクルーザー40系』（三樹書房）に，「京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊地質班関係資料，1955–1956」画像提供

12月27日：『京都大学総合博物館ニュースレター』第59号に，五島敏芳「研究資源アーカイブ通信〈28〉オンライン展示『展示コンテンツ』の開始から終了まで」掲載

2024年1月13日～3月10日：大阪府立近つ飛鳥博物館令和5年度冬季特別展「まくら——古墳時代の石枕と葬送儀礼」に，「京都大学考古学研究室写真：阿武山古墳調査，1934，1987」画像提供

1月22日：「京都大学総合博物館古代エジプト出土資料写真，2011–2018」公開

1月29日：「ジャパンサーチ連携機関向けキュレーションワークショップ」にて事例報告（齋藤，平澤）

（総合博物館 事務補佐員 内山美喜子）

総合博物館日誌 (2023年11月～2024年2月)

展示

▶ スポット展示「しっぽの秘密～しっぽ博士のミニ展示～」

2023年11月1日(水)～12月10日(日)



▶ 特別展「蝶に会える日ー村田泰隆コレクション展ー Vol.2 東南アジアが育んだ多様性」

2023年11月29日(水)～12月24日(日)



子ども博物館・活動報告

実施回数：9回

参加者数：子ども 113名/中学生 10名/

大人 130名

スタッフ (のべ)：30名

レクチャーシリーズ

▶ 第160回 「ひと」を知るためのしっぽ学ーしっぽにたずねる「ひと」への道のりー

東島沙弥佳(京都大学白眉センター/総合博物館)

2023年11月23日(木・祝)



博物館セミナー

*対面とZoomによるハイブリッド開催

▶ 第127回 織豊政権と「高名社会」

朴秀哲(ソウル大学歴史学部/京都大学総合博物館)

2023年12月15日(金)

イベント

▶ 第18回京都大学ホームカミングデイ(リアルとオンラインのハイブリッド開催)

2023年11月4日(土)

[オンライン開催]

2023年11月4日(土)～11月30日(木)

▶ 大地は語る 2023 地球の脈動 宇宙の躍動

2023年11月19日(日)

展示・体験、講演

*京都大学大学院理学研究科地質学鉱物学教室有志主催、京都大学総合博物館共催

協力イベント

▶ 関西文化の日

2023年11月18日(土)・19日(日)

▶ 京都市 留学生優待プログラム「留学生おこしやすPASS」

2024年1月1日(月・祝)～2月29日(木)

▶ 第27回京都ミュージアムロード

2024年1月24日(水)～3月17日(日)

▶ 京都マラソン 2024

2024年2月18日(日)

展示協力(学術標本資料の貸出)

▶ 大阪府立近つ飛鳥博物館(66点)「令和5年度冬季特別展 まくらー古墳時代の石枕と葬送儀礼ー」

2024年1月13日(土)～3月10日(日)

入館者数

7,350名(うち特別観覧 21団体, 668名)

京都大学総合博物館ニュースレター ISSN 2758-0784

第60号 2024年3月29日発行

編集・発行：京都大学総合博物館

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

電話：075-753-3272 FAX：075-753-3277

E-mail info@inet.museum.kyoto-u.ac.jp

https://www.museum.kyoto-u.ac.jp/

*ニュースレターは、京都大学学術情報リポジトリ KURENAI でも公開しております。